309　副甲状腺機能亢進症における骨シンチ像（頭蓋骨を中心に）

大市大　放　小橋肇子、岡村光英、波多信、小田淳郎、越智宏暢、小野山靖人、下西祥裕、大村昌弘、池田穂積

副甲状腺機能亢進症（原発性8例、二次性122例）の骨シンチ像について検討した。検討項目は、前頭、後頭、頭頂、側頭、頭蓋底、上、下顎骨の7部位で、集積の程度視覚的に評価した。又、二次性の長期観察例で、骨シンチ像と、透析期間、血液生化学的所見、経時的な変化についても検討した。

二次性では原発性に比べ頭蓋・上下顎骨への強い集積を示すものが多かった。又、原発性でも二次性においても前頭、後頭、頭頂、上、下顎部への集積が高く、側頭部には高い集積を認めるものは少なかった。下顎は上顎より集積が強く認められた。

310　透析例における二次性副甲状腺機能亢進症(s-HPT)の骨シンチグラフィの検討

藤井広一、大西卓也、大草昭彦、松本富美子、熊野町子浜田辰巳、石田　修（近畿大・放射線科）　竹田照夫、柴　芳浩（同・中央放射線部）

s-HPT における副甲状腺摘出術(PTX) 前後の骨シンチグラムを、とくに頭蓋冠、顎骨の集積の変化に注目して検討した。

対象は平成2年1月から3年3月までの間に、PTX 前後に骨シンチグラフィを施行した22例である。術前に施行した11例中10例で頭蓋冠、顎骨に強集積を認め、このうち8例は術後の骨シンチグラムも施行され、改善2、不変3、増強3例であった。術後から施行された11例中9例は、頭蓋冠、顎骨にかなりの集積が残存し、このうち4例は次回の骨シンチグラムも施行され、改善がみられた。他の部位の変化についても検討を加える。

311　慢性腎不全患者の骨シンチグラムにおける体内分布の数値化　— 生データとAD変換データの比較 —

飯田昭彦、加藤　徹、山名大吾、南部一郎、黒堅賢仁、遠山淳子、大場　覚（名古屋市大、放）　伴野辰雄（名古屋市リハセン、放）　鶴田良成（成田記念病院、腎内）　原　滋（成田記念病院、放）

慢性腎不全患者において、続発性副甲状腺機能亢進症はしばしばみられ、これらの患者の全身骨シンチグラムは通常と異なる体内分布を呈する。私達はこの体内分布の数値化を試み、以前本学会総会において報告した。慢性腎不全患者はその経過が長期にわたる為、生データが消去された症例も多数存在する。今回、長期にわたって体内分布の経時的変化が検討できるようにフィルムよりAD変換したデータをもとに同様のデータ処理を行い、生データから処理したものと比較検討した。AD変換した場合は生データから処理した場合に比較して高値を呈したが、両者の間には相関が認められた。

312　嚢胞性骨病変の診断；3-phase 骨シンチグラムの応用

諸見里秀和、勝山直文、堀川　歩、大田　豊、中野政雄（琉球大学放射線科）

骨シンチグラムは通常、骨病変を有する患者において、他部位の病変の検出、および病変の進展範囲の評価を目的に行なわれてきた。一方、3-phase 骨シンチグラムは、これまで骨病変と蜂窩織炎等、軟部病変との鑑別に際し用いられてきた。今回我々は3-phase 骨シンチグラムを骨腫瘍に施行し、その鑑別診断に関し検討を試みた。このうち、嚢胞性骨病変の鑑別に際して有用な結果が得られたので、今回報告する。症例は8例で、その内訳は動脈瘤様骨嚢腫2例、骨巨細胞腫4例、単純性骨嚢腫2例である。血管相、血液プール相の情報を用いることにより、血管造影を行なうことなくこれらの腫瘍の鑑別診断が可能であった。

313　外傷性大腿骨頭壊死の骨シンチグラフィ

丸岡　伸、木下俊文、坂本澄彦（東北大学放射線科）
中村　護（国立仙台病院放射線科）

外傷性大腿骨頸部骨折や脱臼後の大腿骨頭壊死の骨シンチグラフィ像について検討した。

対象は1985年以降当科で骨シンチグラフィを施行した２７例（計４７件）で、男性１３例、女性１４例、年齢９-８０歳、平均４２.５歳、受傷部位は右側１６例、左側１０例、両側１例である。受傷から初回検査までの期間は８日-９年９ヵ月で、２年以内のものが２５例（平均６.９ヵ月）であった。

骨シンチグラフィ上、大腿骨頭部に明瞭な cold area を認めたものが７例あり、いずれも骨折型は Garden 分類のⅢ、Ⅳのもので、受傷からの期間は８日-１年１１ヵ月（平均６.４ヵ月）であった。

314　強直性脊椎炎の骨シンチグラフィ

大塚信昭，福永仁夫，友光達志（川崎医大核医学）
森田陸司（滋賀医大放射線科）

強直性脊椎炎は，仙腸関節，脊椎および軀幹に近い関節に多発し，関節強直を起こす原因不明の慢性炎症性疾患であるが，その骨病態については殆んど解明されていない．今回，我々は強直性脊椎炎と診断された12例に骨シンチグラフィと二重エネルギーX線吸収測定法による骨塩量定量を行ったので報告する．骨シンチグラフィ上，仙腸関節，脊椎，胸鎖関節部に高率に異常集積を認めたが，手指の関節の異常集積は軽度であった．橈骨骨塩量は正常値であったが，腰椎前後方向の骨塩量は幅広い分布を示した．なお，側面方向の腰椎椎体の骨塩量を測定した例では，すべて低値を示した．このように，強直性脊椎炎の骨病態を把握する上で，骨シンチグラフィと骨塩量測定はその一助となり得ることが示唆された．

Presented by Medical*Online